【ポスター発表】

養子の成長を支えるための家族支援についての研究

－多様な家族形態のあり方を模索する国スウェーデンに着目して－

○　文京学院大学　　森　和子（4390）

キーワード：養子縁組家族、出自を知る権利、ルーツさがし

１．研 究 目 的

スウェーデンは「家族のあり方についてまじめに試行錯誤を続けてきた国」（石原,2010）という指摘がある。男女平等をはじめ、障碍者、老人、移民などあらゆる面から平等化を政策として推し進めてきた国である。離婚再婚も多く、多様な家族形態が認められ親子のあり方も血縁を超え、血を分けた親子関係を重視しない養子縁組が多いことも特筆できる国である。不妊のカップルが子どもをもつ選択肢として国際養子縁組で子どもを迎えることが固定している。養子はアジア、アフリカの諸国で出生した子どもたちであり、親子の間には生物学的絆はないのは明らかにわかる。しかし、彼らの間では、遺伝子や血縁といった自然のつながりより、日々の生活をともにしたつながりが親子の絆として大切にされている。しかし、現在のような血縁のない親子を含む多様な家族形態が認められる社会になったのは近年のことである。スウェーデンでも社会や家庭における男女の自由と平等がない家族のあり方が約 50 年前まで深く根付いていた。本研究では、古い血縁主義的家族観、児童観から現代につながる児童・家族観の過渡期に生まれ育った 2 人の元養子であった人たちから、生まれてから養子になり、育った経過について語ってもらうことを通して養子には生みの親がいて、養親は育ての親であることにどのように向き合い対応してきたのか、また家族の絆づくりのための支援のあり方を考察することを目的とする。

２．研究の視点および方法

調査対象は、スウェーデンの養子と里子のための会員 200 名ほどの NPO の自助グループ AFO（Swedish Organization for adoptees and foster children）の会員で現在 50 代の A さんと 40 代の B さんの 2 名を対象にインタビュー調査を行った。インタビュー調査は、養子の出自を伝える「真実告知」を大きなテーマとして、生まれてから養子になり現在に至るまでの経過をライフストーリー・アプローチにより自由に語ってもらう半構造化面接で行った。また、現在のスウェーデンにおける養子縁組の支援の現状と当事者が望む支援のあり方についても聴取した。2012 年 7 月に、ストックホルムで調査を実施した。

本研究では、Kirk（1984 , 1988）の運命の分かち合い理論（Shared Fate Theory）を理論的基盤とし、生い立ちの経過を養親からの真実告知を含め時系列に沿って語ってもらった内容と当事者による支援のあり方を分析した。Kirk の理論での養親子の絆作りの過程

で重要な３つの要素、１）自分たち親子は、かけがえのない真の親子であると確信すること、2）互いの気持ちに共感しあい、互いを必要とし助け合うこと、3）理解するコミュニケーション能力を持つことを分析枠組みとして用いた。

３．倫理的配慮

研究目的、方法などを調査協力者に説明した上で、同意を得た。調査に関しては、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して行った。結果は研究目的のみに使用され、個人が特定される事がない旨を伝えた上で協力者からの了解を得ている。

４．研 究 結 果

本研究での 2 人の調査協力者の家族の関係性は全く対照的な事例であった。A さんは、養子であることは秘密ではないオープンな家庭で、養親の理解のもとで成人後に生みの親や元里親とも交流をもちながら生活をしていた。一方の B さんは養子であることが秘密の家庭（クローズ）で、思春期に血縁の兄弟の出現により養子であることを知り、養親家庭で育つことの苦しさを抱えながら育つ。成人してから死ぬ間際の生みの親と会ったことにより養親からは関係を切られ 2 重の喪失体験をすることになった。その後自助グループで同じ境遇の仲間と出会うことで前向きに生きることができるようになった。2 人の所属する自助グループでは、成人した養子の生みの親探しの援助（電話相談）、地域でのグループミーティングの開催や養子と里親養育のための陳情活動も行っている。現在スウェーデンの養子斡旋機関（5 か所）では、アジアやアフリカなど遠方の国から養子縁組に来た人たちのために、母国へのツアーを行ってルーツを知る支援をしている。

調査の分析枠組みの養親子の絆作りのあり方について分析した結果、①養親家族と生みの親家族も含めた家族の一員であることの確信をもち、②日常の生活の中でのお互いへの思いの交流と積み重ねがなされ、③養子の生みの親家族に対する養親の肯定的な受け止めと養子自身の生みの親の事情への理解が進み、可能な場合は情報を得たり、交流することにより養子の成長が促され、良好な養親子の絆づくりが促進されることが推察された。

５．考 察

オープンな家庭で育ったＡさんは現在養子や里子たちへの相談や支援を積極的に行っているが、クローズな家庭で育った B さん同様、養親家庭に来るまでには生みの親を含め、何度かの喪失体験を抱えていた。養親の支えや自助グループの支援を得て、出自を知った時から養親家庭にくるまでに喪失していた自分のライフヒストリーを作り直す作業が行われていた。人生を再構築していくためには、良好な関係性をもった養親の理解のもとでの生みの親との再会や交流を通して喪失体験を埋めるとともに、同じ境遇の人たちの共感的理解を基盤とした支援が重要であることが示唆された。